

子どもの福祉と老人の福祉

法経学部教授 組原 洋

まえがき

本稿は、2002年2月15日、那覇市総合福祉センターにおいて、那覇市社会福祉協議会主催の第6回福祉講演会として私が行った同題の講演内容をもとにして、そのとき利用した資料等を再構成したものである。

私は、2001年4月から1年間、学外研究でフィリピン・ミンダナオ島のダバオに滞在していたが、その際に、たまたま、子どもたちのために活動している老人会の活動に接する機会があった。

また、学外研究期間中の同年5月に、建築家の西川馨氏を団長として実施されたイギリス図書館視察旅行に参加し、その結果をまとめる作業を続けていた関係でイギリスについて興味を持ち続けていたので、この講演を依頼されてから、イギリスの福祉についても可能な範囲で調べてみた。

幸い、東京都小平市でも興味深い例を見聞することができたので、フィリピン、イギリス、日本を比較する形で内容をまとめた。当時意識的に、2つの地域ではなく3つの地域を比較するという事を考えていたので、そのような試みの1つと言えよう。

講演の機会を与えてくださった那覇市会福祉協議会と、熱心に聴講してくださった方々にここで感謝の意を表す。また、本文中で述べるように、この講演のためにダバオ周辺と東京の小平市で調査を行ったが、その際お世話になった方々にもここで合わせて感謝の意を表す。

[1] 講演レジュメ

最初に、講演のレジュメを以下に掲げる。

はじめに

「産み損」システム改善の必要性

1, ダバオ

(1) サンアントニオ・バラングイでの活動

バラングイがうまく機能している要因 「上から」と横のつながり

(2) 老人ホームを訪問してみる

国立 Tagum 老人ホームと、Monkayo 支部

ダバオ市立 Co Su Gian Center for the Elderly

2, 東京都小平市

高齢者交流室について

3, イギリス

自立の可及的尊重からくる施設の段階的性格 それを支える「福祉社会」
シェルタード・ハウジングの変遷
Trans Age Action:Age Concern という NGO のコーディネートで 1995 年から。

4, 比較と考察－沖縄の可能性と課題

「時間・空間・人間」および「おカネ」の何が足りないのか。
コーディネーターの必要性
フィリピン人への介護ビザ発給の是非

参考文献：

- ①広井良典編著「「老人と子ども」統合ケア 新しい高齢者ケアの姿を求めて」
(中央法規・2000年)
- ②嵯峨座晴夫編「少子高齢社会と子どもたち」(中央法規・2001年)
- ③リム ボン「新世代交流コミュニティー地域が家族を救うとき」
(自治体研究社・1998年)
- ④武川正吾「福祉国家と市民社会－イギリスの高齢者福祉－」(法律文化社・1992年)
- ⑤阿部志郎・井岡勉編「社会福祉の国際比較」(有斐閣・2000年)

[2] 講演の趣旨

私は、1993年3月にも、那覇市社会福祉協議会主催の講演会で講演をした。そのときの題名は、「時間・空間と人間の設計」である(沖大法学第15号に講演内容をまとめた)。主催者側としては、私が両耳難聴であることから、その体験等を話してほしいということで、テーマは、ボランティア研究集会の一環として行われたので、それに関連することをということだった。当時ボランティア活動は増えつつあったが、その中で、人間関係設定に問題ありと思われるようなケースが目につくようになってきて、それは具体的には、適切な距離関係を取れるかどうかという問題に帰着することが多い。そういうことで、「人間」というのも「じんかん」と読んで、「間」の取り方についての考察をした。その後、阪神大震災を経て、ボランティア活動は広く、普通に行われる活動となっていった。

今回のテーマである老人と子どもの統合ケアについては、学外研究に入る前にすでに文献①を読んで関心を持っていた。

そこに書かれていることを参考にして、私なりにまとめればその趣旨は次のようなものである。

最近、「少子高齢化」という言葉が当たり前のように使われるようになってきている。「少子化」も「高齢化」も、急に起こったことではなく、あらかじめ予想できたことであるが、「少子化」と「高齢化」を一緒にするようになったのは、割合最近になってからのことである。なぜなのか。

日本では、高齢化が非常に急速に進行して、その対応に大きなエネルギーを費やさなければならなかった。その結果、介護保険制度が導入され、実施に至っている。従来、行政中心の措置制度が、契約原理を取り入れたものへと変わった。そのような変化の中で、最近、個々の細かい問題を

超えて、老人福祉のあり方全体に関わる疑問が提起されるようになってきている。一言でいえば、それは、高齢者の問題を高齢者の問題だけに限定していこうとする流れが強いことから生ずる問題である。介護保険制度がスタートしたのはいいが、高齢者ケアというものの中身が非常に狭いものに限定され、矮小化されてしまう方向に事態が動いているのではないだろうか。具体的には、身体介護等の「外形的なケア」中心のものになりすぎてはいないだろうか。また、高齢者をたんなるケアの受け手として、受動的な存在としてとらえすぎているのではないか。ケアというのは、本来、もっと幅広く、豊かな可能性を持つのではないか。介護保険本来の趣旨は、ケアの受け手である老人一人ひとりの尊重ということであったはずなのに、実際には、老人はたんなるお客様に過ぎなくなっているのではないか。このようなことになるのも、突きつめると、高齢者のことだけを切り離して考えることに問題があるのではないか。どんなに施設が立派でも、提供される介護サービスが良質でも、高齢者だけ1つの場所に集め、ケアするという自体どこか不自然でないか。高齢者ケアをもっと、他世代や環境に開かれたものにしていく必要があるのではないか。特に、子どもとのあり方との関係は、高齢者ケアを考えるうえで非常に重要である。十分な交流がなされれば、子どもにとっても、老人にとっても、大きな意味を持つ。

ところで、少子化し、高齢化するとなぜ問題なのか、これを社会構造面から考えると、従来の家族パターンが継続維持できなくなるからである。家族サイズは小さくなって行って、個人をベースにした社会にかわっていく。その結果、従来家族内で処理できていた子どもの養育、老人の介護も、外部の手を借りなければできなくなる。日本では、産業化が進んでからも、会社の中や、社会制度の中に、従来の家族理念をもとにした擬似家族的な考えが認められ、それなりに機能していたが、もはやそれらの凝集力も失われつつある。にもかかわらず、自然発生的なコミュニティにかえて、地域レベルでの意識的なコミュニティを再構築していこうとする動きはまだまだ鈍い。「同居」から「地域居住」への対応がないと、安心して産める場、安心して死ねる場がないまま、問題が深刻化し、悲惨な状態になる。かくして、今日本に一番欠けているのは、いつまでも安心して、楽しみながら生きていける場なのである。

レジュメの「はじめに」で「産み損」システム改善の必要性」とあるのは、次のようなことである。

日本においては、年少人口と老年人口とを合わせた従属人口割合は増えてはいるが、戦後すぐに体験した水準とそんなにかけ離れてはいない。しかし、子どもと比較し老人の方が公費支出が多いために問題視されるわけである。

この点について、文献①第2部第4章「世代間の所得移転と世代間交流による少子化対策の可能性」(池本美香)のメモを以下に示す。

- * 高齢化だけでなく少子化についても、日本より低い国はスペイン・ドイツ・イタリア等があるもののアメリカ・フランス・スウェーデン等に比べると相当に低い。
- * 従属人口としてみると、そんなに増えてない。高齢化に対する危機感が強いのは同じ従属人口といっても1人あたり公的負担費用が大きいから。おおざっぱに計算して、高齢者324万円に対して子ども113万円。1950年に比し、2010年は約1.9倍の公費が必要となる。
- * 仮に子どもへの公費支出を社会保障給付費の家族手当額とし、高齢者のそれを社会保障給付費の

年金額ではかつてみると、日本の子どもへの給付は高齢者への給付と比較して、明らかに低い。合計特殊出生率と相関関係にある。

- * 出生率の上昇は、結婚した夫婦が子どもを産まなくなったということより、未婚率の上昇、とりわけ親と同居している未婚者増加が原因であるといわれる。イタリアも同傾向。ドイツは同居水準は低いが、年老いた親への扶養意識は、親からのサポートを得ようとする態度はうかがえる。（どんなことをしても親を養うとする割合は低く、自分の生活力に応じて養うという、「覚悟のない」態度が多い。）パラサイトとして批判するか、貧しいから仕方ないというか。子に頼るつもりはない親は増えたが、逆に親に頼る子は増えた。
- * イタリア、ドイツ・日本などは子どもに対する支出にきわめて消極的である。共通するのは、戦時中の人口政策への反発が残っている。日本のエンゼルプランでも子どもを持ちたい人に限定して議論し、子育ての第一義的責任は家庭にあるとする立場。これらの国では、概して、公的な教育投資水準も低い。現役世代が、わが子のために支払うのか、見知らぬこのために支払うのかのちがひ。子供をたくさん産んでも、生まれた子供たちは制度上子供を産まなかった人たちの年金を負擔しないといけないから、安心できない。産み損システムになっている。
- * 児童手当を増やしたり、子の扶養控除を増やす等のほか、児童年金構想も提言されている。児童手当は、実際に所得制限があり、昔の救貧的イメージがないとは言えない。現在高齢者世代と現役世代間バランス（年金水準と年金負担水準のバランス）ばかりが議論されて子どもへの給付水準の低さがみえにくくなり、出生率低下につながっている。3世代調和という観点に立った制度の検討が求められる。

ところで、文献②28頁に掲げられた総務庁青少年対策本部「第5回青年意識調査」（平成5年）を見ると、年老いた親を「どんなことをしてでも養う」とする割合は、フィリピン80.7%、日本22.6%、イギリス45.9%となっている。フィリピンについては、多くの親が現に子どもやその家族とともに暮らしている現状を反映している。これに対して、イギリスは個人主義が徹底し、一般に子どもと別居しているのにもかかわらず、まだ同居の割合が比較的高い日本の倍になっているのは意外と言えよう。イギリスでは、別居してはいても、いわゆる「スプーンの冷めない距離」に住んで、しばしば行き来している。これに対して、日本の場合、すねかじり的な同居が多いことが問題とされている。パラサイトシングルといわれるような、いつまでも結婚しないで親と同居して、生活水準を維持する現象も見られる。こういった日本の状況は様々に説明されているが、国際的な比較を試みれば、上記のように、日本は子どもへの公費支出が目立って少ない国だと言える。そういったことも、将来は養ってくれるだろうという親の期待に反するような結果に影響を与えていると考えられよう。

[3] ダバオ

私が学外研究のために滞在していたのは、フィリピン・ミンダナオ島のダバオ市である。ダバオでは、日本フィリピンボランティア協会(JPVA)が私の受け入れ先になっていた関係で、当初、JPVAから資金援助を受けているCMU(Community Medical Union)と一緒に移動児童館活動をやっていた。フィリピンはアメリカの統治期間が長かったので、草の根的に公共図書館があるかと思っ

ら、ごくわずかしかない。本も少ないので、やりたかった移動図書館もできず、紙芝居を作って、現地の話し言葉であるビサヤ語でやってもらうところから出発したのである。CMUは貧困集落での福祉・医療活動を行っているNGOで、その本拠地があるトリル地区周辺を中心に巡回活動をしていた。ところが、貧困集落といっても、飢餓に類するような段階とは明らかに違い、ほどほどに生活できているところが多い。悪い意味での援助慣れみたいのものもあって、貧困というのが一種の売り物になる。子どもたちもだいたい小学校には行っている。そういうことで、本当に援助を必要としている地域はないかと、地域把握も兼ねていろいろあたっていた。候補地として考えられたのは、1つはダバオ市の周辺地域の山間部等のへき地。ダバオ市は広いので、片道2時間以上かかるところもあるし、車では行けず、馬に乗って山道を上り下りが必要なところもある。もう1つは逆に、市の中心部で、特に公設市場周辺に貧困層が大量に住んでいる。そんな中で、10月になって、沖縄から英語の寄贈本が大量に送られてきた。絵本もたくさんある。一転して、その利用の仕方を考えなければならなくなった。

フィリピンでは、就学前の教育をデイケアと呼んでいる。日本の老人デイケアのような、年寄りのための制度ではない。デイケアで1年間教育を受けることが、学校に入学する条件になっているそうだが、経済的な事情で行けない子どもはたくさんいる。アグダオ公設市場付近にこれらの子どもたちのためのセンターをつくることにした。先生として雇ったルースさんがたまたま、アグダオ地区にあるサンアントニオ老人会長のエステリート・ブエナさんと同じ教会に通っていて、同氏を通して、サンアントニオバランガイから土地を提供してもらえた。もともと老人会が子どもや母子家庭の援助活動のために使う予定だった土地だが、費用が集まらないため放置されていた。そこに小さな建物を建てた。建築費は7万ペソ（1ペソ＝2.5円）だった。

バランガイというのはフィリピンの一番下の地方政府単位で、全国に4万余りあり、なかには10万人を超える規模のものもあるというが、平均人口は1バランガイあたり1500人前後である。町内会とか、字（あざ）程度のサイズの組織と考えられる。例えば移動児童館等の活動も、それぞれの場所にあるバランガイが受け入れてくれないと始まらない。このバランガイでは、生活に密着した行政と条例制定等の立法の他、一定範囲の裁判も行われている。外からは見えない会議室だけでなく、通りに面した半公開の場でも毎日のように調停が行われている。調停が成り立たない場合に初めて裁判所に訴えられるようになってきている。一番多い訴えは悪口・中傷だそうである。こういう事件では、訴えるのも訴えられるのも女の人が多い。例えば、奥さんとその夫の浮気相手の女性との間のもめ事とか。借金を返さないというのも多い。バランガイが間に立って、現実的に可能な形で弁済させていく。たいした額ではないし、裁判中も当事者同士で雑談しあって仲のいい友達にしか見えないといったケースもある。本当に気軽に持ち込んでくるようで、まったくびっくりする。普段着の司法というにふさわしい状態である。もともとバランガイ制度は、マルコス大統領時代から導入されたものであるが、民衆の間にうまく根づいていると言えよう。

デイケアセンターについては、バランガイから、個人としてやるのではなく、組織の形にしてほしいといわれ、「組原ラーニングセンター」でどうかと先方から提示されたので、その名前で行っている。希望者が多く、午前と午後の2クラスそれぞれ20数名でうち切った。それ以上入らないのだから仕方がない。私としては、主に、自治体と関係を持つ手段の1つとして考えていて、なかば遊びの心境だったが、お母さんたちは真剣そのものである。まだ試験期間だから修了証明は出せないと

言っているのに、わざわざ正規の自治体デイケアセンターから移ってきた子どもも5名いたことがあとで判明した。説得したのだがそのまま残っている。何か、ダバオにある日系人学校の分校と勘違いされた面もあるらしい。それにしてもビックリするのは、外国人に援助してもらおうということに全然抵抗はないらしい。こちらの活動を当然のように組み込んでくれる。自治体だって、予算が途切れれば事業を途中で放棄してしまうので、どこにつけばいいのか、人々の見る目も肥えているのかもしれない。

ところで、組原ラーニングセンターの建物を建てたあと、これと対になる形で同じ大きさの建物がバラングイによって建てられ、当初予定された目的では使われないことになったのでこれも私が自由に使っているというのである。間髪を入れずに、子ども図書館として使いたいという、簡単に認めてくれた。バラングイと協定を結んで、1年ごとに更新していく。今後私が関係するNGOも関与することができるような内容にした。

こういう次第で、全く予想外にも、定置図書館を運営できることとなり、現在まで継続して運営してきている。

両建物間の屋根付き空間は、老人会の集まり等に利用されている。老人がだいたい家族とともに住んでいることから、どんな活動をやっても子どもと老人とが一緒になることは多い。そして、老人は社会の中でそれなりに重んじられていると感じられる。現在、サンアントニオ地区では、バラングイがうまく運営されている結果、いい形のコミュニティ運営が見られる。

このような状況なので、老人介護施設はわずかである。フィリピンには国立の老人ホームは、3つしかない。マニラ、サンボアングのほか、ダバオから車で1時間余り行った Tagum にあり、2002年1月23日に訪問した。Tagum からさらに車で1時間余り行った Monkayo の支部も2月1日に訪問した。また、ダバオ市立 Co Su Gian Center for the Elderly (Co Su Gian というのは、敷地寄贈者である中国人の名前である) も1月30日に訪問した。これらの施設は、老人にも余り知られていないし、収容している老人は Tagum が83人、Monkayo が14人、Co Su Gian Center が10人で、いくらフィリピンの平均寿命が60歳代である(最近知人からきいたところでは女性はすでに70歳代に達したということである)といっても、これではとうてい足りない。しかもこれらはいずれも、もともとはNGOが始めたものである。しっかりした国の政策がないと、今後問題が深刻化するのには目に見えている。収容老人は、家族から捨てられた人、あるいは家族がいない人が多く、全国から来ている。男女半々の感じだが、女性の方が圧倒的に元気である。地域との交流等は特に認められなかった。運営の特色としては、アメリカの影響で、専門職制度が取られていることが挙げられる。

サンアントニオバラングイのあるアグダオ地区は、前記のように、ダバオでも貧乏な人々が多い地域であるが、だからこそ地域としてまとまることの重要性をはっきりと認識したリーダーが出てくるのではないかと。フィリピンは、発展途上地域の通例で、金持ちと貧乏人とがはっきり分かれている。国全体としてはそういう状況を克服しないと十分な発展は期待できないだろう。

[4] 東京都小平市

日本でも、子ども用の施設と老人用の施設を合築する等の例は結構見られるようになってきたが、必ずしもうまくいっているとは言えないようである。

小平市については、私の母が住んでいた関係で、93年の講演の際にも調べた。私の母は、2001年11月、数え88歳で亡くなった。母は、転勤が多かった父が亡くなってから30年余り、東京の小平市学園西町に住んだ。ここに住み始めた当初はまだ若く、元気だったが、10年ぐらい前からぼけ始め、最近、家にいても、ヘルパーさんのお世話になりっぱなしだった。元気だったときは、他人（ひと）様のお世話になるのが嫌いで、付き合いもごく限られていたのに、ぼけ始めてからは、家族だけではとても対応できなくなっていった。そして、意外にも、ぼけてみたら、お世話してくださる方々に愛され、かわいがられ、それまでとは違った味が出てきた。最後に入院したのは、一橋病院という、家から歩いて5分ぐらいのところ、葬式屋も家のすぐそば、葬儀は学園西町地域センターというところで行った。お通夜とその翌朝告別式をやって4500円という安さにはびっくりした。もっとも、地域センターが葬儀場として使われることについては、周辺住民から苦情もあるらしい。母は亡くなる数日前まで、車椅子で散歩させてもらうことができた。病院のすぐ横に玉川上水があり、並木道を散歩できる。ちょっと前までは、そばにある平櫛田中（ひらぐしでんちゅう）館を母とよく訪れた。平櫛田中は108歳まで生きた彫刻家である。非常に面白い作品が多く、訪れるたびにいつも愉快になった。平櫛田中は年取るに従い大きな作品に挑戦して行って、最晩年に取り組んでいた大きな丸太が田中館入口に置かれている。

講演では、2001年に小平市立小平第二小学校内に設置された高齢者交流室を紹介した。この交流室については、文献②の第11章「学校における高齢化教育」で同小学校校長の山下敏夫氏が書いておられるのを読んで知った。交流室は校舎の一角で、従来PTAが使っていたところを改造したものである。学校内にあるが、管轄は小平市高齢者福祉課で、小平市社会福祉協議会に委託され、実際上の運営は社協がやっている。利用者は介護認定を受けていない人が対象である。デイサービスではないから、決まった時間に来るわけではないし、送迎もない。学校との交流は、午前と午後の休み時間に1日2回20分ずつ子どもたちがやってくる。和室での碁や将棋は人気があるようだ。総合学習等で授業の一環として行われることもある。高齢者も給食を食べることについては今実験段階である。ほかは、デイサービスと余り変わらない内容である。校長の人柄もあって、円滑着実に運営されている印象を受けたが、全体的に高齢者が子どもたちに遠慮してしまっている感じはある。しかし、日本ではこのような例はまだ少ないので、今後の発展に注目したい。以下に、訪問記録を掲げる。

020207（木曜日）

午前10時前に、自転車で小平市立第二小学校に行く。「小平市高齢者福祉室」の看板がみえたので、学校正門からでなく、校庭横にある入り口から入って行く途中で老人たちがテレビを見ながら体操を始めたところだった。久保田さんというおばさんが応対してくれて、ここは社協が運営しているので、そちらに行ってくださいという。そして電話もかけてくれた。

社協（小平市学園東町1-19-13小平市福祉会館4階 tel:042-344-1217 fax:042-341-6220）に行き、事業係の吉田さんから話を聞いた。

小平市高齢者交流室は、介護認定を受けていない方を対象に、介護を受けずに元気にやっていけるようにするというのを第1の目的とし、第2に、学校教育にも資することを目的としている。建物は、国の補助100%（介護保険運営を円滑にするための特別予算）で、もとPTAが

使っていた教室（南校舎の1階一番右端）を改造したものである。改造費は約3000万円だったそうである。管轄は小平市の高齢者福祉課であるが、社協に委託され、實際上運営は社協が当たっている。月～金の10時から4時まで開館している。学校を利用しているということもあり、利用者は登録制になっていて、現在108名が登録している。デイサービスではないので、送迎はないし、何時から何時までいると、きちんと決められているわけでもない。毎日来る人もいればたまに来る人もいる。やることは、参加者も含めて相談しながら決めていく。学校生徒との交流は、10時20分からと1時20分からの2回の休憩時間（それぞれ20分間）に行われるほか、新指導要領で設けられた総合学習等の時間では授業の一環として交流が行われる。現在、学校の給食と一緒に食べることに調整中だそうだが、今のところは各自弁当等を持ってきて食べているとのことである。

交流室の平面図、「小平市高齢者交流室条例」（小平市条例第43号）、「同条例施行規則」（小平市規則第6号）をもらった。

このあと、交流室に戻った。すでに午前中の交流時間は過ぎていたので、和室を見せてもらい、壁の展示をちょっと見ただけで辞去し、午後に改めて訪問することにした。

1時20分にまた行ってみると、今日は休憩時間が普段より早くなったそうで、ちょうど終わりがけだったが、生徒たちがいて遊んでいた。住倉さん（誰もが名札をつけているので姓が分かる）が隣の和室に案内してくれた。おじいさん同士1組が碁を打っていたほか、生徒も2組、五目並べと将棋をしていた。しかし、チャイムが鳴ると、生徒たちは引き上げていった。住倉さんの話では、老人は70台の方が多くいそうである。話すうち、住倉さんは実は、組原の母がお世話になっていた、「ひまわり」という介護ボランティアグループのメンバーで、母を知っていることが分かった。住倉さんに、学校とのことをきいてみたら、校長室に直接連れて行ってくれた。校長室は、交流室奥から廊下に出て、すぐのところにある。校長の山下敏夫氏が在室で、明日10時から話を聞けることになった。それからもとの部屋に戻った。今月の予定表のコピーをもらった。午前と午後に分けられていて、だいたいデイサービス等とかわらないが、午後が埋まっていない日もかなり多い。学校との関係では、「3年生授業参観（手打ちうどん作り）」とか「給食試食会」とかがある。今日は、午前中は絵手紙を描いていた。みなさん非常にうまかった。午後は牛乳パックを使って、ティッシュ入れを作っていた。部屋の壁に生徒との交流の写真や、生徒の作文が貼ってあった。

020208（金曜日）

午前10時に、高齢者交流室を経由して校長室に行く。校長の山下敏夫氏に、まず、自己紹介のために、最近私が琉球新報に書いた「落ち穂」のコピーと、組原ラーニングセンターの写真を差し上げる。私が子ども図書館に興味を持っていることが分かると、「ごぞんじですか おもちゃ図書館 No. 15」（日本おもちゃ図書館財団）、「めだかふあみりい通信」をくれた。後者は、山下氏が中心になって活動している、障害者教育のNPOのようで、山下氏も書かれている。おもちゃ図書館の全国連絡会世話人代表の肩書きの名刺ももらった。自宅住所は小平市ではなく埼玉県川口市である。

すぐに10時20分になったので、一緒に交流室に行って、様子を見た。そんなにたくさんでは

ないが、生徒たちも来ていた。校長室に戻ってから、どんな生徒が来るのかときいてみたら、将棋の好きな生徒と、おじいさん・おばあさんと話してみたいという生徒。特にかわった生徒ではなく、普通の生徒がやってきているということだった。交流室は、PTAと下駄箱のあったところであるが、同じ建物なのに、交流室ができるとともにここは高齢者福祉課のものとなった。だから学校ではない。珍しいあり方だが、困難というわけでもないだろう。それに、ホームが必要になってから老人だけであれこれやるより、元気なうちからこういうところでいろいろやった方がずっと面白いし、効果もあがるという。同感である。小平市では同様の施設をさらにつくることを検討していないが、来週立川市が視察にくるそうである。昨日社協できいた、給食についての調整というのは、デイサービスのよう毎日何人と決まっている訳じゃないことが問題であるのと、あと、学校側は10名(10名ないし20名とも)ぐらいが適当という意見だそうである。現在は月1回ぐらい試験的に給食を食べてもらっているが、それは、老人だけ、交流室で食べてもらうのである。今後、たとえば老人が教室に行って生徒たちと一緒に食べるということも考えられるが、ゆっくり自然に、無理なく進めていきたいというのが一番大きな方針だそうである。もし制度化されれば、そのときは老人に費用を負担してもらうことになるそうだ。老人ホームではないが、世話人を有償で置いているそうで、だいたい毎日世話人が交替するシステムになっている。予算について、社協の吉田さんに連絡してくれて、資料をいただけることになった。その他に、資料として、「きょういく@コム 2001年5月号」掲載の、「学校に“町”ができた！—高齢者交流室」という記事、および、「小平二小だより」No.287, 288 をもらった。

それから、社協に行って、吉田さんから予算を記した資料をもらった。これによれば、交流室建設の際の国庫補助額は正確には3338万円である。運営予算は人件費144.6万円+事業費142.9万円の合計287.5万円である。

[5] イギリス

イギリスについては、前記のように、私は当時イギリスの図書館関係の本を共同で書いていた関係で、ついでに社会福祉についても調べてみたのである。文献④でイギリスの高齢者福祉の特徴を学び、文献⑤等で最近の動向を把握した。「揺りかごから墓場まで」という言葉に代表されるような福祉国家というのはイギリスから始まったが、その基本的な特徴は、できるだけ老人の自立を尊重することである。イギリスの対人サービスは、在宅と施設サービスに分けられ、施設サービスもまずはシェルタード・ハウジングという管理人や警報つき住宅が考えられ、それがダメなら老人ホームということになる。福祉の枠内で処理できなければ、ナーシング・ホーム、そして病院という段階構造になる。この中で、シェルタード・ハウジングというのが興味をひく。これは、日本のケア付き住宅と同一視される傾向があるが、あくまで住宅である。第一種、第二種と区分けされているがたいした区別ではない。老人ホームに入ることが必要になったときに、本人が望まなかったり、老人ホームに空きがなかったりした場合のために、特別ケアを提供する重度シェルタード・ハウジングというものが生まれ、これがケア付き住宅に近いものだろう。

シェルタード・ハウジングはかつては比較的大規模な集合住宅がその典型だったが、次第に小規模化し、地域との統合について配慮がなされるようなデザインへと変化している。最近では痴呆高齢者用シェルタード・ハウジングの設計もされているが、コミュニティの真ん中に小グループのシェ

ルタード・ハウジングを配置し、地域全体がそこを囲むように設計されている。そこから外出するときは隣接した買い物ゾーンを通過しなければならないように設計されているので、コミュニティのみで目配りすることができる。

制度全体の中で、質量とも民間非営利団体の役割が大きいことに気づく。本講演との関連では、アメリカのフォスター・ペアレント・プログラムをモデルにした老人の子どもへの貢献活動 Trans Age Action という活動が活発である。Age Concern というNGOのコーディネートで1995年からプログラムを展開している。高齢者は、交通費・食費以外の手当を受けない。参加している高齢者は、低所得層ではなくほとんど中産階級である。イギリスにおいても、子どもと高齢者とがふれあう機会はほとんどなく、両者は社会的に孤独である。特別のニーズをもつ子どもや家族に対して高齢者がサポートを行うことを通じて、高齢者はケアを受ける対象であるばかりでなく社会の一員として役割を認識することができるようになる。Age Concern は「時間資源の豊富な高齢者」に対して訓練の機会を提供し、訓練を受けた高齢ボランティアたちは、学校・プレイグループ・クラブ活動・病院・施設・ファミリーセンター・障害を持つ子どもの施設などで子どもの教育者として、相談相手、または指導者として、活動を展開している。「ゆっくり時間をかけて一緒に考えてくれる」「一緒にいると安心」等の評価がある。以上の諸例については、文献④第3部第1章「老人と子ども」統合ケアに関する先駆的試み（工藤由貴子）を参照されたい。

[6] 比較と考察－沖縄の可能性と課題

実際に講演をしたときには、時間が十分になくて、比較はほとんどできなかった。聴講者の多くが民生委員の方々の方であったので、次のように述べて締めくくった。

人生の先輩として、老人が子どもの教育に関わるのはごく自然で当たり前のことではないだろうか。そういう環境がないなら、作ればいいし、作るべきであるとも思う。本格的に取り組むためには、適切なコーディネーターが必要である。また、日本では上からの制度作りの側面が強すぎる。イギリスはもちろん、フィリピンでも、NGOの存在が非常に大きい。このように行政と現場をつなぐこと、あるいは現場と現場をつなぐことは、今後重要性を帯びてくると考えられるが、「間」をつなぐものとして、民生委員の役割は興味深い。本当に必要とされるニーズを発見するソーシャルワーク的な役割を果たしていくよう期待したい。以上の考察をふまえて沖縄の現状を考えると、家族のあり方については、フィリピンと類似性が認められる面もある。特に女性がしっかりしているのは、現在フィリピンで、エスタンバイといって、男性が働かないでブラブラするのが社会問題となっているのと似たものを感じる。しかし、波照間島など、離島に行ってみれば、家族だけではやっていけない段階になっていることは一目瞭然である。また、イギリスのようなシステムも、何度も引越しなければいけないという問題点がある。もうちょっと老人が動かないでやっていけるシステムは考えられないだろうか。こういった点をふまえて、老人だけでなく大人がみんな、自分の子どもだけでなく、地域子ども全体に関心と責任を持つようなタイプのシステムを目指すべき時が来ていると考えられる。最後に、宿題として聴講者に考えてもらいたいのは、フィリピン人への介護ビザ発給の是非である。イギリスでも、介護関係の仕事分野は、旧植民地出身者の黒人等が圧倒的に多いといわれる。日本でもしフィリピン人に介護ビザが発給されるようになれば、多数の人が働きにやってくるだろう。そのことについて考えてみてほしい。沖縄等からはかつて、ダバオ

等に多数の者が移民として出かけていったのである。今や逆転してしまった現状をどう考えればいだろうか。

以上であるが、今の段階で考えていることを以下に述べてみたい。

フィリピンでは現在のところ、私が体験的に見聞した限りでは「少子化」の兆候は感じられないが、「高齢化」の方は確実に進んでいると思われる。

朝日新聞2002年4月20日社説「経験を分かち合って」によれば、現在60歳以上の人々は6億3000万人で、世界の全人口の10%を占めるが、2050年になると21%に達し、その大半が途上国に住む。今世紀前半に、先進国だけでなく途上国も高齢化という共通の課題に直面するのである。またこの社説は、20年前には、国連の第1回高齢化に関する世界会議で日本は、「家族に包まれた幸せな高齢者像」を語る自信を見せていたが、今は介護保険という制度に老後の不安をいやす柱の1つを委ねている、とも述べている。まったく、この20年間でこんなにも大きな変化が起こるとは思わなかった。実際に体験してみないと分かりそうもない。

しかし、フィリピンで老後の備えらしいものがないのは、そういうことだけではなく、金持ちは金持ちで自分たちの備えをするが、多くの国民は毎日の生活に追われて先の心配をする余裕もないということだろう。だから、仕事になりさえすれば、外国への出稼ぎもいとわない。

「日本では老人問題が、フィリピンでは子どもの問題がある」として、お互いに助け合おうということで、日本がフィリピンの子どもの教育や福祉面で援助し、フィリピンには若者がたくさんいるから、日本にヘルパーさんとして来てもらおうというような発想が現場では見られる（例えば、日本フィリピンボランティア協会報第37号（2002年2月22日発行）に記された網代正孝会長の主張等参照）が、ちょっと長い目で考えれば問題があるのではないか。さらには、非常に長い目で見れば、日本や西欧の高齢化問題というの、いずれ時間が解決してくれるとも言える。したがって、どれぐらいの時間サイズで考えるかがポイントになる。個人個人として責任の持てそうな長さというと、1世代、つまり30年ぐらいではないかと思うのだが、どうだろうか。ボランティアとか、他人のために何かするというときは、最低それぐらいの見通しを持ってやらないと、次世代形成にかかわるような問題については責任が持てないのではないかと思われる。

1年間近く、フィリピンにいながらイギリスのことを考えているうちに、いつもフィリピンをイギリスと比較する癖がついた。産業革命はイギリスから起こり、日本などもそのあとをついていった形だから、結果として、フィリピンと日本の共通性みたいなものも浮かび上がる。一番感じたのは、イギリスでは、大きな計画を立てるだけでなく、それを実行してみるということである。計画はあくまでたたき台的な感じが強く、ともかく実施して、問題があるならば改善していく。そういう形に変えていく。イギリスが保守的な国といわれながら、停滞を乗り越えて、今日まで先進大国の地位を保持できたのも、このような進み方によるところが大きい。そして、たとえば保守党から労働党に政権交代しても、具体的な政策を見ると意外に連続している。

フィリピンの場合、これまで調べた範囲では、立派な法律等も作文に過ぎない場合が多い。農地や森林を含む国土利用関係分野では特に顕著で、「不法占拠」で満ちている。ブラジルなどでも、たとえば、憲法規定は現実離れで、国際援助を得るために世界のマスコミや世論向けにマイナスイメージ払拭のため実効性のない法を作っているとの声が国内にもある。原因とその評価はさまざまに考えられるが、何をやっても変わらないという声をよく聞かされる。

日本の場合も、改革とかの類が多くはタテマエに過ぎないことは同じである。変えるのではなく、状況がいや応なしに変わるといふ形の対応を繰り返すので混乱が起こる。これだと、失敗を生かしくく、いい意味の積み重ねができないし、教育もうまくいかない。

これが沖縄になると、現在でもフィリピンとの区別がつかなくなってくる。

ちょっとそれるが、そもそも私が沖縄に来たのは、1978年から79年にかけてラテンアメリカを旅行中、多くのウチナンチュに会い、その故郷を見にいつてみたくなったからである。独特な魅力を感じさせる人が多かった。沖縄に来てからも、ちょっと年輩の人と話をすると、当の本人が外国への移民や出稼ぎの経験をもっていることも珍しくなかった。日本本土への出稼ぎも、外国への移民も同じようなこととして意識されていた。昔のことを今のことみたいに生き生きと話してくれた。経験の種類は違うが、私の妻の父は明治42年（1909年）生まれで豊見城の出身なのだが、戦前は京都の菓子屋に丁稚奉公していた。戦争で召集されて満州に行ったが、引き揚げ際に朝鮮でつかまって、シベリアに抑留され、出征してから7年たってやっと沖縄に復員したら、自分の1周忌が終わって半年たったところだったそうである。この20年あまり沖縄に住んで、逆に、沖縄から出ていけない人に会うことが多くなったが、全然面白くない。だいたい、こんな小さい島にずっと住めるといふこと自体、私には驚異である。それが、死ぬまでいたいなんていうのだから、呆然とする。たとえば、フリーゾーンの構想なども、沖縄が「南」に属する地域だとするならよく分かる考え方だが、日本という「北」の傘の中に入っているだけではうまくいきこないと思う。沖縄に呼び寄せられるのではなく、出ていけばいいのだ。出ていった先で、個々のウチナンチュはすごく面白い生き様を見せてくれるのだ。実際、愉快的ウチナンチュは、沖縄の外にいる。現在のように、沖縄という場所にこだわり過ぎると、「北」と「南」の狭間にいる面白さが生きてこない。政策として海外出稼ぎや移住支援のネットワークを作ったら、これまでの伝統を生かしながら、新たな展開が可能だろう。

南北の狭間に位置しているという意味で、沖縄は、発展途上地域にとっても、先進地域にとってもよいモデルを提供できる可能性があるのではないか。たんに長寿である、ということを超えて、子どもにとっても、老人にとっても住みやすい地域像を示せれば、大きな意味があろう。

(2003年1月8日 脱稿)